

飛鳥寺塔心礎から出土した 金製品の材質に関する考察

筆者は、これまでわが国で出土した代表的な古代金製品の材質分析と製作技術を探り、古代金製品に関する基礎情報を蓄積してきた。古代金製品の材質の特徴は、金糸など一部の金製品には純度が高く純金に近いものもあるが、一般には銀を含み、銀以外の金属、例えば銅などはほとんど含まれないことである。純金は柔らかくよく伸びるが強度がない。銀を含むことで強度を増し、立体的な成形を可能にすることができる。従って、最終的に要求する形態によって材質を選択していたと考えられる。

弥生時代から古墳時代にかけての金は、完成品、あるいはインゴットの状態で渡来したと考えられるが、1998年奈良県明日香村の飛鳥池遺跡の工房跡からは、製品としての完成品でない金が出土し注目された。大半は製作途中に出た切り屑や、鑄込みの時に飛び散った金滴などであり、7世紀後半に金を素材とした加工作業が行われていた確証となった。飛鳥池遺跡に隣接する飛鳥寺はわが国最古の寺院として知られ、この寺の塔心礎から金、銀の埋納物が出土している。これは、飛鳥地域において寺院建築が本格化し、金銀製の荘厳具が重用されるさきかけとなる遺物であろう。

今回、飛鳥寺の塔心礎から1956年の調査で出土した金銀製品（飛鳥資料館保管）を分析する機会を得た。ここでは、特に金製品について、飛鳥池遺跡から出土した金の分析結果と合わせて検討した。分析は、非破壊的手法による蛍光X線分析法による半定量分析である。

飛鳥寺塔心礎から出土した金・銀製品

飛鳥寺塔心礎から出土した金製品は、延板状が7点、粒状が1点、計8点である。延板状の7点は、以下のようになり、大きく3タイプに分かれる。①大きめのもの：3点（折りたたんだ1点を含む）、②比較的小さいもの：3点（大きさ2cm程度で折り目あり）、③小さなインゴットを細く叩き延ばしたもの：1点。①に関しては、飛鳥池遺跡からも、金の薄いシートを細かく折ったものが出土している。さらに、金粒状をタイプ④とする。

分析結果から、延板状の材質は形状のタイプ別に対応していることがわかった。タイプ①は、金が97.5～99.4%と高く、残りは銀、微量の銅を含む。金の純度は23.4～23.9K（純金は24K）。タイプ②は、金が83.4～89.4%（20～21.5K）とやや低く、残りは主に銀、2%程度の銅を含む。タイプ③は、金が81.2%（19.5K）、残り18%が銀、1%弱の銅を含む。このように、金の純度の違いが形状に反映された結果が得られ興味深い、いずれもこれまで確認してきた古代金製品の組成の範疇に入る。なお、タイプ①～③の延板状の7点は、いずれも金のインゴット（素材）として渡来したものを荘厳具として埋納したと考えてよいのではなかろうか。タイプ④の金粒は、金80.8%（19.4K）、銀5.2%、銅14%という組成を示した。この金粒は銅が高い値をとり、これまでに述べた古代金製品の特徴から大きく外れる。飛鳥寺が1196（建久7）年の火災で塔を焼失した際に、創建当初の心礎舍利坑から荘厳具が掘り出され、改めて埋め戻された。その時に失われたものも多いとされるが、逆に新たなものが追加されたことはないのだろうか。タイプ④の金粒の材質からこのような想像も膨らむが、銅を多く含む金片が一点飛鳥池遺跡から出土していることもあり、中・近世期にまで至る金製品の時代性を銅の含有量の違いだけに負わせることが可能なのか、今後とも分析事例を増やしていく中で検討していく必要があると考えている。